

## 仮想的有能感に関する研究動向

—— 自尊感情や関連する感情との関係に注目して ——

澤 尻 紘 輝\*<sup>1</sup>・村 山 拓\*<sup>2</sup>

特別ニーズ教育分野

(2018年9月21日受理)

### 1. 問題の所在

最近の若者の一つの特徴として他者軽視や他者軽蔑を通して、根拠のない有能感を高める傾向があると示されている(速水・木野・高木, 2003)。一般的に、有能感は実際の成功体験や社会的承認に基づいて高められるものと考えられるが、このように過去の経験に依らず、また実際にはさほど多くの成功体験を経ているにも関わらず、他者を過小に評価するか否定的に評価して得られる有能感は仮想的有能感と呼ばれる。仮想的有能感は「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される(速水・木野・高木, 2004)。一方、仮想的有能感の対極にあるものとして自尊感情がある。自尊感情は主に直接的なポジティブ経験により形成されたものと考えられている(立花, 2013)。

速水ら(2004)は他者軽視の尺度として仮想的有能感尺度(Assumed Competence Scale 2: 以下ASC-2)を作成した。しかし速水ら(2004)によれば他者軽視には2種類あり、I. 自身に自信がないために他者軽視を行うことで偽りの有能感を持つとするものと、II. もともと本人に自信があることで、他者の欠点が見え、他者軽視に至るものがある。速水ら(2004)はIを仮想的有能感と考えたが、ASC-2だけを使っていれば、「仮想的有能感尺度において高得点を示すものには、実際のポジティブ経験から高い自尊感情を有する者も含まれる可能性は否定できず、当然この両者が混在していると予想される(鈴木・速水,

2015)。そこで両者を切り分けるべく自尊感情の尺度を併用したところASC-2と自尊感情尺度は無相関に近いことがわかってきている。そこで2つの尺度を用いて4つの型に分類することにした(図1)。他者軽視は低く自尊感情が高い自尊型、他者軽視も自尊感情も高い全能型、他者軽視は高いが自尊感情は低い仮想型、他者軽視も自尊感情も低い萎縮型である。これまで、仮想的有能感が高いとしていたものの中には全能型も仮想型も含まれていたことになる。仮想型を前述のIとし、全能型をIIとした。今野ら(2015)によれば自尊型は「自身に自信があっても他者を軽視しないため、社会的に望ましいとされる」傾向、全能型は「自身には満足しているが、他者に対し不満を抱いており、他者を軽視する」傾向、仮想型は「自身の失敗の原因を自分以外のせいにしたり、他者を批判したりすることによって、自身の有能さを誇示しようとする」傾向、萎縮型は「他者への不満はないが、自身に対しては不満があり自信が持てず、失敗の原因をすべて自分のせいにする」傾向があるとされている。

なお、鈴木・速水(2015)では仮想的有能感と自尊感情が独立する概念であることを確認するため、大学生354名について、両者の相関係数を算出したところ、 $r = -.09$ と無相関であることが指摘されている。

また、速水ら(2004)は、他者軽視および自尊感情と過去の成功経験・失敗経験との関連を検討した結果、自尊感情は過去の成功経験とは正の、失敗経験とは負の相関を示していたのに対し、他者軽視は過去の成功経験との相関がみられず、人間関係に関するいくつかの失敗経験と正の低い相関がみられたと報告して

\*1 東京学芸大学大学院 教育学研究科

\*2 東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

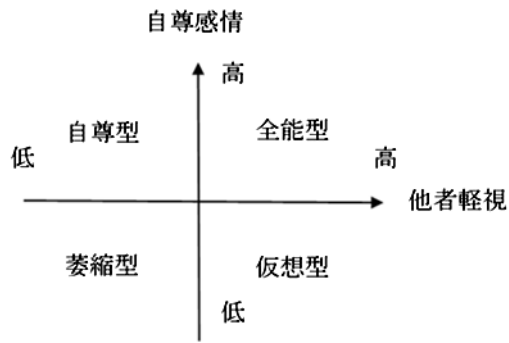


図1 有能感の四類型 (速水ら, 2004 をもとに作成)

いる。速水 (2011) が仮想的有能感の研究動向をレビューしているように、仮想的有能感に関しては負の感情や対人関係、学習の動機づけなどさまざまな角度から研究がなされている (速水, 2011)。仮想的有能感は青年期前期から中期にかけて高まるとされ (山本ら 2007), 仮想的有能感の高さは個別性への気づきや怒りの感情、不快感情経験と正の関連を示すことが報告されている (速水ら, 2004)。また速水は対人関係においては他者軽視をする傾向が強いほど、日常からの強い敵意感情を経験する傾向があるのに対し、自尊感情の低さは、経験される抑圧感情の強さと関連していると述べている。

本稿では、青年期における障害児の他者への認知の特性を明らかにするとともに、自己認知の内実、また自己認知と他者への認知の関係性について明らかにするための基礎的作業として、我が国における仮想的有能感研究の動向について文献を用いて検討することを目的とする。

## 2. 仮想的有能感に関する文献

今回は国立情報学研究所学術ナビゲーター「CiNii」において「仮想的有能感」でヒットしたもののうち、2007年以降に発行されたものを検討した (計52件)。仮想的有能感に関する先行研究は、この概念にいち早く注目・提唱した速水自身によって、展望論文として整理されている (速水, 2011)。本章では上記の展望論文を参考に2011年以降に発行されたものを中心に (1) 仮想的有能感タイプ分類方法 (2) 精神的影響 (3) 対人関係 (4) 学業 (5) 攻撃性 (6) インターネット依存といじめ (7) 障害について分類し概観する。

### 2.1 仮想的有能感タイプ分類方法

1章でも述べたように速水ら (2004) によれば他者軽視を自身に自信がないために他者軽視を行うことで

偽りの有能感を持つようとするものと、もともと本人に自信があることで、他者の欠点が見え、他者軽視に至るものがあるとした。両者を切り分けるべく自尊感情の尺度が併用されている。前述の通りASC-2と自尊感情尺度は無相関に近いとされている。そこで2つの尺度を用いて、他者軽視は低く自尊感情が高い自尊型、他者軽視も自尊感情も高い全能型、他者軽視は高いが自尊感情は低い仮想型、他者軽視も自尊感情も低い萎縮型の4つの型に分類することが、仮想的有能感の特徴を探るうえで有効である。

しかしASC-2と併用して用いられる自尊感情尺度は明確にされておらず、論文ごとに用いられる尺度は異なる。また仮想的有能感尺度の得点と自尊感情尺度の得点をそれぞれを高群、低群に分類したものが有能感類型であるが、高群・低群判別の基準値も明確にされておらず、論文ごとに基準値が変動している状態である。そこで本章ではASC-2と併用して用いられている自尊感情尺度と、ASC-2と自尊感尺度の得点高群・低群の分類基準値について検討する。

今回52件の論文を概観したが、自尊感情尺度についてはRosenberg自尊感情尺度 (1965) の日本語版 (山本・松井・山成, 1982) を用いたものが34件、Rosenberg自尊感情尺度 (桜井 (1997) が星野 (1970) の翻訳を修正) を用いたものが3件、自尊感情尺度-中学生版 (鈴木・小川, 2008) が1件、自尊感情尺度とのみ記載されていたものが2件、自尊感情尺度を用いなかったものが12件であった。

ASC-2と自尊感情尺度の得点高群・低群の分別基準値については、平均値を用いたものが22件、中央値を用いたものが6件、記載のなかったものが9件、有能感類型分類を行わなかったものが14件、その他1件であった。

論文ごとに用いられる自尊感情の尺度は異なり、有能感類型に関しても調査ごとに基準値が変動し、統一されたデータではないことがうかがえる。

### 2.2 精神的影響について

仮想的有能感の精神的影響についてはこれまでも怒りや負の感情について述べられている (速水, 2011)。鈴木ら (2015) は仮想的有能感と不安傾向、防衛機能の関連性について検討し仮想的有能感の高さが不安傾向に影響を与えるとした。また日常生活においても自閉空想や投影、隔離、行動化、受動攻撃など多くの防衛機制を働かせているが、この防衛機制は予測や抑制などの成熟した防衛機制に比べても未熟なものであり、仮想的有能感の高い者の精神的な不安定さが示唆

された。

姜ら(2017)は挫折経験の捉え方が個人に及ぼす影響について仮想的有能感との関連性を述べている。姜は挫折経験を自分の思いや期待を大きく裏切られるもの、また、自分の力が報われない経験と捉えた場合、自己への否定が強まり、自尊心が低下すると述べている。そのため、他者を軽視することにより自尊心を保ちやすくなる。つまり挫折経験をポジティブな経験と捉えるか、ネガティブな経験と捉えるかによって自身への精神的影響、あるいは他者軽視へとつながると述べている。

自尊感情が影響を及ぼすものとして主観的幸福感がある。主観的幸福感とは経済的または社会的な指標に基づくものではなく、個人の主観的判断、心理的側面によってもたらされる幸福感のことである(中村, 2016)。中村らは仮想的有能感により高められた自尊感情においても主観的幸福感に影響を及ぼすのかを大学生を対象に検討している。その結果、主観的幸福感に影響を及ぼす因子は自尊感情のみであり、仮想的有能感の要因となる他者軽視とは相関がみられなかった。この見解は精神的健康について検討した鈴木ら(2015)の見解とも一致していた。また中村は仮想的有能感の高い者は、ポジティブな感情とネガティブな感情が同居しており、感情が安定していない可能性が示唆された。また仮想的有能感と信頼感には関しては負の相関がみられ、他者軽視傾向が高く自尊感情が低い群では「不信」が最も高く、他者軽視傾向が低く自尊感情が高い群では最も「不信」が弱かったことが述べられている。

藤井ら(2014)は仮想的有能感と妬みと他者の不幸を喜ぶ感情であるシャーデンフロイデ(schadenfreude)との関連を検討した。シャーデンフロイデは他者の不幸を喜ぶ感情であり、他者が不幸に陥った責任が相応であると知覚され、その不幸の程度がさほど深刻ではない場合に生起すると考えられている。その結果「全能型」「仮定型」「萎縮型」において妬みとシャーデンフロイデが結びつきやすかった。このことから「自尊型」が自己評価の要因として、他者に重きを置いている可能性が示唆された。

### 2. 3 対人関係について

伊田(2008b)は仮想的有能感と他者との関係性について「生活価値観」という観点から見た。生活価値観とは自他の境界線という側面から自己のあり方を検討し、それが個人の価値観と深くかかわっているという視点から構成された概念である。具体的には生活価

値観質問紙により測定され、その下位尺度は、自己決定意志、他人志向、集団志向、安楽志向、コミュニティ志向の5つからなる。その結果、仮想的有能感とは安楽志向と有意な正の相関がみられた。また集団志向とは弱い負の相関がみられ仮定型はこの集団志向が高いことが述べられている。

小平(2017)は有能感タイプと自己形成への意識や自己変容願望との関連性を検討していく中で、他者軽視と自己変容の志向性の模倣志向との負の相関がみられたと述べている。これは他者軽視傾向の高さが、周りにいる人物や身近な人物への同調や模倣を避ける傾向につながるとしている。また他者軽視や有能感タイプに関して、乳幼児期から青年前期までの親の養育態度や愛着関係の影響を受けている可能性があるとしている。

### 2. 4 学業について

仮想的有能感が高い者は、共同作業に対し否定的な認知を述べやすく(鈴木, 2010)、学業場面において友人に援助要請や援助授与をしにくい(小平ら, 2008)など、仮想的有能感の高さが他者との相互活動や本人の学習を困難にしている可能性が示唆されている。そこで松本(2013)は仮想的有能感の程度によってグループ活動の取り組み方や対人ストレスへの対処行動に違いがみられるかを検討した。その結果、仮想的有能感が高い者は、グループ活動においてメンバーの意見を聞いたり受け入れたりする姿勢に欠け、活動に伴うストレスへの対処が困難であった。また仮想的有能感の高さが、グループメンバーの立場を理解することを困難にさせ、自分の立場からのみグループを理解しようとする姿勢につながることが示唆された。

小浜(2014)は学習の先延ばしが、課題の失敗を招き、自尊感情の低下や否定的感情と繋がる不適応的な行動であるとし、先延ばしパターンを否定感情先延ばしパターン・楽観的先延ばしパターン・計画的先延ばしパターンに分け仮想的有能感との関連を検討した。その結果、計画的先延ばしパターンの者は学業遂行が高く、仮想的有能感が低かった。また楽観的先延ばしパターンの者は否定感情先延ばしパターンや計画的先延ばしパターンの者に比べ、学業遂行が低く、仮想的有能感が高かった。これは楽観的先延ばしパターンを行う者は先延ばしによって自尊感情や教科に対する自信を失っている状態であるが、その一方で相対的な有能感を保つため、無意識に他者軽視を行っていること状態であることを示唆している。



これまで述べてきた通り、仮想的有能感は学習や対人関係と密接に関係している。坂井ら (2016) は中学生において、自身の状況や居場所感が仮想的有能感にどのような影響を与えるかを、学校生活スキルと関連させて検討している。学校生活スキルは「自己学習スキル」「進路決定スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」「同輩とのコミュニケーションスキル」が挙げられている。仮想型は健康維持スキルが低いものが最も居心地を悪く捉えており、萎縮型では自己学習スキルを高めることによって、居心地のよさの感覚を向上させる可能性があることが示唆された。また集団活動スキルの獲得に関しては自尊感情とは正の、他者軽視とは負の相関がみられ、仮想的有能感の高さが集団活動を困難とする研究 (松本, 2013) ととも一致していた。

## 2. 5 攻撃性について

仮想的有能感の特徴の一つとして、「仮想型」は「全能型」「自尊型」「萎縮型」と比べ敵意感情を強く感じるとされている (小平, 2007)。また仮想的有能感は怒りの制御と負の相関を示すことも述べられている (速水, 2011)。そこで高木ら (2014) は仮想的有能感と置き換えられた攻撃に注目し関連性を検討した。置き換えられた攻撃とは個人が何らかの挑発を経験した際、それをもたらした者ではない他の対象に攻撃を表出することである (高木ら, 2014)。その結果、仮想的有能感が直接的に攻撃の置き換えを強めることが示唆された。

佐々木 (2014) は怒りを想起させるような不快な場面において、仮想的有能感が攻撃性にどのような影響を及ぼすのかを検討している。佐々木は攻撃性の方向を自己と他者の双方でとらえ検討し、「仮想型」は他者に対して攻撃的である一方で、自責的でもあるとしている。また「仮想型」は他者に対する不信感が強く、ネガティブな出来事に遭遇した際に状況を悲観的に捉える傾向があるとしているのみならず、自分には対処できない問題であると放棄し解決をあきらめる傾向があり、その責任を他者へと求める傾向があることが示唆された。

## 2. 6 インターネット依存といじめについて

青山 (2014) はスマートフォンの急速な普及とそれに伴う若者のインターネット依存傾向と仮想的有能感の関係性について検討している。またインターネット依存と同時にインターネットを通したいじめについても検討を行った。青山は高校生を対象に質問紙調査を

行った。その結果、インターネット依存傾向において「自尊型」は「全能型」「仮想型」「萎縮型」に比べ有意に得点が低かった。また「萎縮型」は集団生活へのなじめなさ (山本, 2007) などの日常生活での孤立が現実世界での居場所のなさにつながりインターネットでの没入的・依存的な関与を強めるとしている。インターネットいじめに関しては「全能型」「仮想型」は「自尊型」「萎縮型」に比べインターネット上での攻撃的言動の得点が有意に高かった。このことから現実での他者軽視傾向の強さがインターネット上でも行われていることが示唆される。またインターネットいじめ経験においても、被害経験に関しては「自尊型」が「全能型」「仮想型」「萎縮型」より少なく、加害経験は「全能型」「仮想型」が「自尊型」「萎縮型」に比べ多かった。

青山ら (2016) は同様の調査を大学生に対しても行っている。高校生に対する調査とは異なり、インターネット上での攻撃的言動と仮想的有能感類型との相関は見られなかった。インターネット没入的関与においては、「仮想型」「萎縮型」が「自尊型」よりも没入傾向が強かった。また依存的関与に関しては、「全能型」「仮想型」「萎縮型」が「自尊型」よりも依存傾向が強かった。これは他者軽視の強さが対人関係を構築させることを困難にさせ、その結果からくる孤独感によりインターネットに依存的・没入的になってしまう可能性を示唆している。

## 2. 7 障害児・者について

仮想的有能感に関する研究は多岐にわたっているが、定型発達児を対象としたものが圧倒的に多く、障害児を対象にした先行研究は、管見の限り、パーソナリティ障害に関するもの (市川・望月, 2014) と自閉症スペクトラム障害に関するもの (立花, 2013) の2件しか見当たらなかった。

市川・望月はパーソナリティ障害 (Personality disorder: 以下PD) と仮想的有能感の関連を検討している。市川・望月はPDの中で境界性・自己愛性・演技性・強迫性・依存性・回避性PDに着目し、仮想的有能感の4類型との比較を行った。仮想型は不安定な対人関係や感情の不安定さを特徴とする境界性PDが高かった。また非柔軟的で秩序や統制にとらわれる強迫性PDにおいても仮想型が高いことを述べている。仮想型・萎縮型は依存性・回避性PDが高かった。これは他者に対する服従性や対人接触からの回避といった否定的な自己感を維持させるような行動の動機づけと関連している。一方、他者との関係性をより親密な

ものとみなしたり、自分への関心をひいたりすることを主な特徴とする演技性PDにおいては全能型と自尊心が高いことが述べられている。全能型、仮想型においては誇大的で過剰な自己愛を特徴とする自己愛性PDの高さが示唆されている。

立花は知的障害のない、あるいは知的障害があっても軽度な発達障害児における仮想的有能感と学習援助要請の関連を検討している。仮想的有能感に関して定型学習援助要請は他者に助言を求めたり、質問したりすることで、自分の力では解けない課題の解決を求める行為であり、(1) 援助要請をおこなわない「要請回避」(2) 答えをそのまま教えてもらおうとする「依存的要請」(3) ヒントを与えてもらい、援助により自らも考えようとする「適応的要請」の3種類に分けることができる。仮想的有能感が高い発達障害児は自尊感情が高くなるほど友人に対して援助要請しないこと、自尊感情が高い発達障害児は仮想的有能感が高くなるほど友人に対して援助要請しないことを明らかにしている。また仮想的有能感が高い発達障害児は自尊感情が高くなるほど適応的要請をしないことも示唆している。

### 3. 考察と今後の課題

仮想的有能感に関するわが国で発表された文献をみてきた。定型発達児に関して仮想的有能感と関連した研究は少なくない。そのほとんどが質問紙を使用した計量的研究であった。また仮想的有能感は自尊感情尺度とACS-2を併用した際に用いられる概念であり、ACS-2を他者軽視尺度として用いている論文もあった。

今回は仮想的有能感タイプの分類方法についても検討したが、当初の仮説通り用いられている自尊感情尺度や分類基準値は論文ごとに様々であった。今後自尊感情尺度や分類基準値について精査し研究にあたる必要がある。

仮想的有能感の研究では仮想的有能感タイプを一つの尺度とし、別の尺度と組み合わせその関連性を検討しているものが多い。今後の研究において仮想的有能感とは別にどのような尺度を用い関連性を明らかにするかという検討が課題である。また障害児・者と仮想的有能感に関する論文は少なく、障害種、年齢、定型発達児との比較などの研究と少数事例に基づく質的研究を行っていく必要性を指摘することができる。障害児・者の他者への認知を知ることで、新たな支援や自尊感情に関する方策を行う手がかりが得られるのでは

ないかと考える。

### 参考文献

- 青山郁子 (2014) 高校生・大学生におけるインターネット・携帯電話依存、ネットいじめ経験とひきこもり親和性の関連。国際基督教大学学報。I-A 教育研究56, 43-49.
- 青山郁子・高橋舞 (2016) 大学生におけるインターネット依存傾向、攻撃性、仮想的有能感の関連。日本教育工学会論文誌 39 (Suppl), 113-116.
- 伊田勝憲 (2007) 仮想的有能感と2つの達成動機: “assumed-competence” の個人差をめぐって。日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (16), 158-159.
- 伊田勝憲 (2008a) 高校生における仮想的有能感の検討: 第IV段階・第V段階および2つの達成動機に注目して。日本教育心理学会総会発表論文集 50 (0), 248.
- 伊田勝憲 (2008b) 仮想的有能感と生活価値観の関連: 他者との関係性に注目して。日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (17), 72-73.
- 伊田勝憲 (2010a) 仮想的有能感と心理社会的発達の関係: Eriksonの第I段階から第IV段階に注目して。日本教育心理学会総会発表論文集 52 (0), 466.
- 伊田勝憲 (2010b) 教員養成課程学生における学業的自己疎外感と仮想的有能感: 教職志望度を考慮した分析の試み。日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (19), 105.
- 市川玲子・望月聡 (2014) パーソナリティ障害特性と仮想的有能感との関連: 一有能感の4類型間の比較。パーソナリティ研究 23 (2), 96-100.
- 市村 (阿部) 美帆・丹野宏昭・渡部麻美 (2011) 本当は○○な現代青年 (5): 自尊感情および仮想的有能感と各側面の自己評価との関連。日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (20), 159.
- 植村善太郎 (2010) 仮想的有能感と勤労観および労働意欲との関連: 社会人を対象とした調査結果から。日本教育心理学会総会発表論文集 52 (0), 376.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009) 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連。パーソナリティ研究 17 (3), 250-260.
- 片山緑 (2016) 中学生における親との関係性と仮想的有能感。就実大学大学院教育学研究科紀要 2, 112.
- 木野和代・速水敏彦 (2009) 仮想的有能感の形成と文化的要因: 大学生を対象に。日本教育心理学会総会発表論文集 51 (0), 26.
- 木野和代・速水敏彦・岡田涼 (2008) 仮想的有能感の形成と文化的要因: 中学生を対象に。日本教育心理学会総会発表論文集 50 (0), 245.

- 熊谷隼・杉山憲司 (2007) いじめ・いじめられ経験と仮想的有能感・自尊感情の関連性. 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (16), 166-167.
- 小平英志 (2014) 大学生の他者軽視傾向が政治的自己効力感および政治関与に与える影響. 日本福祉大学子ども発達学論集 (6), 1-10.
- 小平英志 (2017) 大学生の他者軽視傾向と自己形成意識及び自己変容の志向性－相関関係・因果関係の分析から－. 現代と文化：日本福祉大学研究紀要 = Journal of Culture in our Time 136, 1-14.
- 小平英志・青木直子・松岡弥玲・速水敏彦 (2008) 高校生における仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション. 心理学研究 79 (3), 257-262.
- 小平英志・池田安世 (2011) 仮想的有能感と自己評価維持：有能感タイプによる検討から. 日本教育心理学会総会発表論文集 53 (0), 231.
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 (2007) 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して：—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して. パーソナリティ研究 15 (2), 217-227.
- 小浜駿 (2014) 先延ばしのパターンと学業遂行および自己評価への志向性. 教育心理学研究 62 (4), 283-293.
- 今野義孝・吉川延代・会沢信彦 (2015) 仮想的有能感と自尊感情はいじめにどのように関係するか：大学生における中学時代の想起による. 人間科学研究 36, 123-131.
- 坂井李奈・高田奈美・五十嵐哲也 (2016) 中学生の有能感タイプによる居心地の良さの感覚の違い：学校生活スキルとの関連から. 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要 6, 37-45.
- 桜井茂男 (1997) 現代に生きる若者たちの心理—嗜癖・性格・動機づけ—. 風間書房.
- 佐々木麻美 (2014) 青年期における仮想的有能感と自他への攻撃性の関連. 日本教育心理学会総会発表論文集 56 (0), 892.
- 佐藤美佳 (2012) 看護学生の仮想的有能感と自律性欲求・学習動機づけとの関連—4年制大学と3年制短期大学との比較—. 八戸短期大学研究紀要 (34), 87-109.
- 佐藤美佳 (2013) 看護学生の友人関係への動機づけと学習動機づけおよび自律性欲求・有能さの欲求との関連：自己決定理論の視点から. 日本看護研究学会雑誌 = Journal of Japanese Society of Nursing Research 36 (2), 35-46.
- 島義弘 (2012) アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連. パーソナリティ研究 21 (2), 176-182.
- 杉本英晴・速水敏彦 (2012) 大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望. 発達心理学研究 23 (2), 224-232.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2008) 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討. 筑波大学心理学研究 36, 97-104.
- 鈴木有美 (2010) 『他人を見下す若者たち』の性格的特徴—仮想的有能感と5因子性格検査の関連—. 瀬木学園紀要 (4), 6.
- 鈴木有美・速水敏彦 (2015) 精神的健康との関連からみた防衛機制としての仮想的有能感. 感情心理学研究 23 (1), 23-31.
- 高木邦子 (2010) 仮想的有能感と独自性欲求：自尊感情との比較から. 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (19), 38.
- 高木悠哉・赤間健一・松岡律・森岡陽介 (2014) 他者影響力の自己認知と仮想的有能感が攻撃の置き換え傾向に及ぼす影響の検討. 環太平洋大学研究紀要 (8), 187-193.
- 高橋優太・高平小百合・小林亮 (2008) 自尊感情と仮想的有能感：家族内での役割行動の観点から. 日本教育心理学会総会発表論文集 50 (0), 244.
- 立花紗亜耶 (2013) 発達障害児における自尊感情と仮想的有能感および学業的援助要請に関する検討. 東京学芸大学平成24年度卒業論文 (未公開)
- 中野良哉 (2012) 理学療法学科学生の職業的アイデンティティと仮想的有能感. 理学療法科学 27 (2), 147-150.
- 中野良哉 (2017) 仮想的有能感の学年による変化. 高知リハビリテーション学院紀要 = Journal of Kochi Rehabilitation Institute 19 (1), 7-10.
- 中村文香・奈良依璃子・五十嵐哲也 (2016) 有能感タイプと主観的幸福感の関連：信頼感の差異に注目して. 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要 6, 47-54.
- 橋本剛 (2013) 日本型競争社会は若者の他者不信や他者軽視を高めるのか：文化的自己観と社会経済的地位が一般的信頼と仮想的有能感に及ぼす影響. 日本青年心理学会大会発表論文集 (21), 34-35.
- 林幸克 (2013) 自尊心を着実に育成する生徒指導の特質と課題. 学校教育研究 28 (0), 47-57.
- 速水敏彦 (2011) 仮想的有能感研究の展望. 教育心理学年報 50, 176-186.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2003) 「仮想的有能感」をめぐって. 日本教育心理学会総会発表論文集 (45), 46-47.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004) 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 51, 1-8.
- 速水敏彦・野崎与志子・梅本貴豊 (2010) アメリカ合衆国大学生の仮想的有能感. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 57, 47-59.



- 姜信善・清沢彩夏 (2017) 挫折経験のとらえ方が個人に及ぼす影響についての検討. 富山大学人間発達科学部紀要 11 (2), 1-11.
- 藤井勉・澤田巨人 (2014) 他人を見下す人は他人の不幸も喜ぶのか? : 一仮想的有能感の類型別に見る妬みとシャードンフロイデの関連一. 感情心理学研究 22 (Supplement), 2-2.
- 福田豊子 (2015) 家庭科教育による「仮想的有能感」抑制の可能性. 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集 58 (0), 118.
- 星野命 (1970) 感情の心理と教育. 児童心理 24, 1445-1477.
- 臆島奈緒子・原田克巳 (2011) 仮想的有能感と自尊感情との関連: 優越承認欲求と劣等感の観点から. 日本青年心理学会大会発表論文集 (19), 72-73.
- 松田君彦・宮下洋平 (2009) 仮想的有能感に関する研究 (1). 鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編 61, 103-110.
- 松本麻友子 (2013) 大学生のグループ活動における仮想的有能感: 対人ストレス場面の対処行動に着目して. 日本教育心理学会総会発表論文集 55 (0), 173.
- 松本麻友子・速水敏彦・山本将士 (2008) 仮想的有能感と対人関係との関連 (1): 仮想的有能感の変化に影響を及ぼす要因の検討. 日本教育心理学会総会発表論文集 50 (0), 246.
- 松本麻友子・速水敏彦・山本将士 (2013) 高校生における仮想的有能感と対人関係との関連: 一仮想的有能感の変動に影響を及ぼす要因の検討. パーソナリティ研究 22 (1), 87-90.
- 松本麻友子・山本将士・速水敏彦 (2009) 高校生における仮想的有能感といじめとの関連. 教育心理学研究 57 (4), 432-441.
- 山本将士 (2007) 仮想的有能感からみた高校生のいじめ. 人間文化研究 8, 191-205.
- 山本将士・速水敏彦・松本麻友子 (2007) 仮想的有能感からみた高校生の問題行動. 日本教育心理学会総会発表論文集 49 (0), 342.
- 山本将士・速水敏彦・松本麻友子 (2008) 仮想的有能感と対人関係との関係 (2): 仮想的有能感の低下と教師のかかわり方. 日本教育心理学会総会発表論文集 50 (0), 247.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究 30, 64-68.
- Rosenberg, M. (1982). *Society and the Adolescent Self-image*. Princeton, Princeton University Press.
- 渡部麻美・市村 (阿部) 美帆・丹野宏昭 (2011) 本当は○○な現代青年 (4): 自己がインターネット利用に及ぼす影響の性差. 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (20), 158.

別表 文献検討結果一覧

番号	著者	年号	目的	対象者	方法	分類基準	結果
1	小平	2017	自己形成への意識（自己形成意識）や自己変容の願望（自己変容の志向性）について、他者軽視との関連を検討。	大学生163名 (男性73名、 女性90名)	・ 仮想的有能感尺度 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山成, 1982))  ・ 自己形成意識尺度 ・ 自己変容の志向性尺度	記載なし	・ 他者軽視と自己変容の志向性の模倣志向との負の相関がみられ、他者軽視傾向の高さは、周りにいる人物や身近な人物への同調や模倣を避ける傾向と関連する。 ・ 他者軽視や有能感タイプに関しては、乳幼児期から青年前期期までの親の養育態度や愛着関係の影響を受けている可能性がある。
2	中野	2017	理学療法士を目指す学生の仮想的有能感や学年が上がることにより経時的に変化するのか。	4年制医療系専門学校に在学中の理学療法学科学生62名(男性38名、女性24名)	・ 仮想的有能感尺度2 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山成, 1982))	平均値	・ 他者軽視傾向、自尊感情ともに学年間で有意な差は認められない。 ・ 4タイプにおける学生の比率において、学年間で有意な差は認められない。 ・ 仮想的有能感タイプが学年間で変化した学生が72%。 ・ 全能型から自尊型への変化が最も多かった。
3	姜ら	2017	挫折経験の捉え方が個人に及ぼす影響の多様性についての検討。	大学生453名 (男性278名女性175名)	・ 挫折経験のとらえ方及び挫折経験の影響に関与する各尺度 ・ 仮想的有能感尺度	分類なし	挫折を自分の思いや期待を大きく裏切られるもの、また、自分の努力が報われない経験ととらえた場合、自己への否定感が強まり、自尊心が低下する。そのため、他者を軽視することにより、自尊心を保とうとしやすくなる。
4	中村ら	2016	・ 仮想的有能感と主観的幸福感、信頼感との関連性の検討。	大学生457名 (男性174名女性283名)	・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ 仮想的有能感尺度2 ・ 主観的幸福感尺度 ・ 信頼感尺度(成人版)	平均値	・ 主観的幸福感は自尊感情に影響を受け、他者軽視とは関連がなかった。 ・ 仮想的有能感が高い者はポジティブな感情とネガティブな感情が同居しているため、感情が安定しない。 ・ 仮想的有能感と信頼感に関しては負の相関がみられた。
5	坂井ら	2016	中学生における仮想的有能感と自身の状況、居場所間の関連を検討。	中学生814名 (男子417名 女子397名)	・ 学校生活スキル尺度 ・ 学校適応感尺度 ・ 仮想的有能感尺度 ・ 自尊感情尺度 - 中学生版(鈴木, 2005)	平均値	・ 中学生において学習面のスキルの高さは自らの精神的健康を高め、対人関係も良好にさせる効果がある。 ・ 健康維持スキルの高さは、ストレス反応の軽減につながり、ストレス反応の低さは居心地の良さとの正の相関を示す。 ・ 「居心地の良さの感覚」と自尊感情は正の相関がみられた一方他者軽視とは負の相関がみられた。 ・ 集団活動スキルの獲得に関して、自尊感情とは正の、他者軽視とは負の相関がみられた。
6	片山	2016	・ 親からうけいれられていないという感情が仮想的有能感をたかめているかの検討。	中学校2年生231名	・ 中学生の親への思い尺度 ・ 仮想的有能感尺度 ・ 自尊感情尺度	記載なし	・ 親からの被受容感の高さは仮想的有能感とは負の、自尊感情とは正の相関があった。 ・ 仮想型は自尊型より親からの被受容感が低かった。 ・ 仮想型において、親から受け入れられていないという感情が仮想的有能感を高めていた。
7	青山ら	2015	・ インターネット依存と仮想的有能感の関連性の検討。	大学生176名 (男性56名 女性120名)	・ 仮想的有能感2 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ インターネット行動尺度	平均値	・ 仮想型および依存型はインターネットの没入時間が有意に多かった。仮想型は実生活での不満や良好な対人関係が築けず、孤独感からネットに依存し、萎縮型は現実世界での孤独感からネット依存に発展する。
8	今野ら	2015	仮想的有能感と自尊感情が、いじめにどのように関係しているかを検討。	大学生434名 (男204名、 女子230名) 分析対象 392名 (男200名、 女子192名)	・ 仮想的有能感尺度 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ いじめ被害経験尺度といじめ加害経験尺度 ※中学生時代を思い出し、そのころの感情について回答。	仮想的有能感、自尊感情得点をz変換し、大規模クラス分析	・ 仮想的有能感と自尊感情は、いじめ加害経験者や、いじめ被害といじめ被害の両方の経験者とその他のいじめの経験者に比べて高かった。 ・ 男子では他者軽視がいじめ加害の程度を強める要因である。 ・ 女子では自尊感情がいじめ加害の程度を緩和する要因であった。 ・ 仮想型ではいじめ加害経験者も多かった。
9	福田	2015	仮想的有能感と家庭科教育に関連があるかを明確にし、仮想的有能感を抑制する可能性を探る。	中学198名 高校194名	・ 仮想的有能感尺度(ACS-2) ・ 家庭科教育に関する質問紙	分類なし	・ 仮想的有能感家庭科教育への親和性と負の相関関係があった。 ・ 家庭科教育は仮想的有能感を抑制することが可能である。
10	鈴木	2015	仮想的有能感と不安傾向、防衛機制、および精神的健康との関連を検討。	大学生300名 (男性106名 女性194名)	・ 仮想的有能感尺度 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ 状態-特性不安検査	中央値	・ 仮想型は不安傾向が顕著であり、日常生活において自閉的空想、投影、隔離、行動化、受動攻撃など多くの防衛機制を用いている。 ・ 精神的健康(主観的幸福感)は自尊感情と関連を示した。
11	小平	2014	・ 仮想的有能感と政治的自己効力感の関連の検討。 ・ 政治的関心と他者軽視の関連の検討。 ・ 他者軽視と政治関与行動の関連の検討。	大学生327名 (男性125名 女性202名)	・ 仮想的有能感尺度 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ 政治的関心尺度 ・ 政治的自己効力感尺度 ・ 政治に対する評価シート ・ 政治的関与行動アンケート	平均値	・ 他者軽視と政治に対する評価との間には負の相関があった。 ・ 他者軽視と政治的自己効力感の間には正の相関があった。 ・ 他者軽視傾向は政治への否定的な評価や態度と関連し、国民の声が政治に反映されないという傾向と関連する。 ・ 他者軽視傾向は政治に関する知識有する、政治に関与する資格があるとの自己評価を高める。
12	小浜	2014	学習活動の先延ばしと仮想的有能感の関連の検討。	大学生292名 (男性180名 女性110名 不明2名)	・ 先延ばし意識特性尺度 ・ 学業遂行質問紙 ・ 仮想的有能感尺度2 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ 目標志向性尺度	中央値	・ 先延ばしパターンが楽観的パターンの者は、否定感情パターン、計画的パターンに比べ学業遂行が低く、仮想的有能感が高く、遂行目標が接近と回避のどちらにおいても低い。 ・ 計画的先延ばしパターンは学業遂行が高く、仮想的有能感がひくかった。
13	市川ら	2014	パーソナリティ障害(PD)を境界性・自己愛性・演技性・強迫性・依存性・会費制PDと分類し各PDと仮想的有能感との関連を検討。	大学生および大学院生304名 (男性115名 女性185名 不明4名)	・ PD特性尺度 ・ 自尊感情尺度 (Rosenberg日本語版(桜井, 2000)) ・ 仮想的有能感尺度2	平均値	・ 境界性PDと強迫性PDは自尊感情が低く、他者に対する否定的感情は高かった。 ・ 演技性PD・依存性PD・回避性PDは自尊感情の高さあるいは引きが関連した。 ・ 自己愛性PDは他者に対する否定的感情が強く関連した。
14	藤井ら	2014	仮想的有能感とシャーマンフロイデや妬みの感情の関連性について検討。	大学生および大学院生92名 (男性32名 女性60名)	・ 自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ 仮想的有能感尺度 ・ 自尊心IAT ・ 妬み尺度 ・ シャーマンフロイデ尺度	中央値	・ 全能型・仮想型・萎縮型において妬みとシャーマンフロイデが結びつきやすい。 ・ 妬みやシャーマンフロイデにおいては顕在的自尊感情のみならず潜在的自尊感情を検討する必要がある。



澤尻・村山: 仮想的有能感に関する研究動向

番号	著者	年号	目的	対象者	方法	分類基準	結果
15	高木ら	2014	仮想的有能感と影響力との関係性について検討。	大学生141名 (男性72名 女性69名)	・他者影響力の自己認知尺度 ・仮想的有能感尺度2 ・日本語版BIS/BAS尺度 ・攻撃の置き換え傾向尺度(DAQ)	分類なし	・仮想的有能感が直接的に攻撃の置き換えを誘発する。 ・影響力の低さがBIS(行動抑制システム)を活性化させることにより、攻撃の置き換えを誘発した。
16	佐々木	2014	仮想的有能感と攻撃性の関連について検討。	大学生および大学院生263名 (男性81名 女性182名)	・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・攻撃性質問紙 ・3次元モデルに基づく対処方略尺度	平均値	・仮定型では他者に対して攻撃的である一方で、自責的でもあるという結果が得られた。 ・仮定型は他者に対する不信感が強い。 ・仮定型はネガティブな出来事に遭遇した際に状況を悲観的にとらえる傾向がある。 ・自分には対処できない問題であると放棄し解決をあきらめる傾向があり、またその責任を他者へと求める傾向にある。
17	青山ら	2014	高校生においてネット依存とネットいじめの問題と仮想的有能感の関連について検討。	高校生263名 (男性157名 女性106名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 ・インターネット行動尺度 (下位尺度: 自己開示・所属感獲得・攻撃性言動・没入的関与・依存的関与)	記載なし	・ネット依存傾向は自尊型が他の型より有意に低かった。 ・自尊型は日常生活における不満等が少ないため、ネット依存傾向がみられない。 ・萎縮型はネットへの没入的・依存的関与が自尊型より高かった。 ・全能型・仮定型はネット上での攻撃言動が有意に高かった。
18	橋本	2013	現代社会を特徴づける要素としての経済格差や主張性規範などが、若者の他者不信や他者軽視に影響を及ぼす可能性について検討。	大学生183名 (男性62名 女性121名)	・一般的信頼/用心尺度 ・文化的自己感尺度 ・主観的社会経済的地位 ・仮想的有能感尺度2	分類なし	・相互協調的自己感が高い時、相互独立的自己感と仮想的有能感に正の相関があった。 ・相互協調的自己感が維持されたまま、相互独立的自己感まで求めることが、仮想的有能感を促進しうる。
19	佐藤	2013	自律性の欲求・有能さの欲求との関連、および学習動機づけとの関連を明らかにすることで、動機づけをより自律的な動機づけへと高める方法を模索。	看護学生 1691名	・友人関係への動機づけ尺度 ・自律性欲求尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・仮想的有能感尺度2 ・学習動機づけ尺度	分類なし	・看護学生は、看護系以外の大学生・短大生と比較して学習動機づけが高く、自律的な動機づけを持っている。 ・自尊感情を先行要因とした自律性欲求の自己決定は、学習動機づけを高める要因となる。 ・仮想的有能感は友人関係への動機づけを低くし、学習動機づけも低くする。
20	松本ら	2013	仮想的有能感の変動に教師・親・友人関係の変動がどのような影響を及ぼすのかを検討。	高校生171名 (男子116名 女子55名)	・仮想的有能感尺度2 ・児童の生きがい感尺度 ・父親・母親との親和性尺度 ・友人関係尺度	分類なし	・仮想的有能感の変動には担当教師との積極的な関わり、特に生徒理解が重要である。 ・教師とのかわりがない場合、教師が自分のことを理解し、認めてくれたという経験が乏しく、自身を持つことが難しくなり仮想的有能感を高める。
21	松本	2013	・グループ活動への取り組み方と仮想的有能感の関連について検討。 ・グループ活動内での対人ストレスが生じた場合の対処行動と仮想的有能感との関連を検討。	大学生および大学院生132名 (男性48名 女性78名 不明6名)	・社会人基礎力尺度 ・仮想的有能感尺度2	平均値	・他者軽視の高群は、グループ活動においてメンバーの意見を聞いたり受け入れたりする姿勢に欠け、活動に伴うストレスへの対処が困難である。 ・非対人的処理行動を他者軽視高群は有意に多く行っていた。 ・他者軽視の強さは自己に注意が剥くことによるストレスへの効果的対処が行えず、不適応につながる可能性がある。
22	中野	2012	理学療法士を目指す学生士の仮想的有能感が職業アイデンティティ形成に及ぼす影響を明らかにする。	理学療法士を目指す学生 177名 (男性99名 女性78名)	・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・職業的アイデンティティ尺度	平均値	・仮定型はどの下位尺度においても職業的アイデンティティの形成度合いが自尊型より有意に低かった。 ・仮定型は所属している集団に対する違和感が高く、集団志向的側面に門閥を抱える。 ・萎縮型は個人的な課題に取り組むことに対して疎外感を持つ。
23	佐藤	2012	看護学生の仮想的有能感と自律性欲求・学習動機づけの程度とその関連を検討。	看護学生 1691名	・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・自律性欲求尺度 ・学習動機づけ尺度	平均値	・自律性欲求の「自己決定」と学習の自立的動機づけは1年生が最も高い。 ・仮想的有能感の高い者は学習が他律的で目的意識をもって取り組むことができず、仮想的有能感を得るための手段として学習が位置付けられている。 ・自己決定と自尊感情には弱い正の相関が認められた。
24	島	2012	アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連を検討。	大学生613名 (男性196名 女性411名 不明6名)	・一般他者版ECR ・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982))	中央値	・不安と自尊感情には負の相関があった。 ・回避と他者軽視の相関は弱い。 ・アタッチメントスタイルと有能感スタイルは、相互に関連を示していた。
25	杉本ら	2012	他者軽視に基づく仮想的有能感と進路選択の困難さに影響を及ぼす就職に対するネガティブなイメージとの関連について検討。	大学生339名 (男性101名 女性238名)	・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・仮想的有能感尺度2 ・就職イメージ尺度 ・時間的展望体験尺度	平均値	・仮定型は自尊型に比べ就職に対して希望を持ってず、拘束的なイメージを持っている。 ・仮定型は時間的展望において、過去・現在・未来に対して肯定的に展望していない。 ・仮定型は就職をネガティブに捉えることで、自己評価を最低限維持する自己防衛的を行っている。
26	臈島ら	2011	仮想的有能感と優越承認欲求との関連について検討。	大学生450名 (男性214名 女性236名)	・優越承認欲求尺度 ・劣等感尺度 ・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982))	分類なし	・他者軽視が強い人は、優越承認が高かった。 ・仮想的有能感が強いものは劣等感が高かった。
27	市村ら	2011	青年の自己評価および仮想的有能感に影響を与える要因として、過去・現在・未来の各側面に対する自己評価を検討する。	大学生281名	・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・仮想的有能感尺度 ・過去・現在・未来の自己評価質問紙	平均値	・男性の方が女性より仮想的有能感が有意に高かった。 ・仮想的有能感が高い者は過去の自己評価に高い評価を示した。 ・男性においてのみ、仮想的有能感が高い者は現在の自己評価に高い評価を示した。
28	小平ら	2011	学業領域と余暇領域の自己評価における有能感タイプの比較。	大学生145名 (男性60名 女性85名)	・仮想的有能感尺度 ・自己評価尺度	記載なし	・仮想的有能感と学業領域における自己評価は負の相関がみられた。 ・余暇領域では仮想的有能感の自己評価への影響は少なかった。
29	伊田	2011	教員養成課程学生において、教職に消極的な学生が仮想的有能感とともに疎外感を抱くのかを検討。	大学生60名 (男性31名 女性29名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・学業的自己疎外感尺度	記載なし	・自尊感情と学部違和感、時間拘束感、授業疎外感にそれぞれ負の相関があった。 ・教職志望消極群は、自尊感情が有意に低く、萎縮型と仮定型に分布が偏った。 ・集団目標とのミスマッチに伴って少数派の苦しい立場に置かれることが有能型と疎外感に関連していた。

番号	著者	年号	目的	対象者	方法	分類基準	結果
30	高木	2010	他者軽視と自尊感情を独自性欲求との関係から比較し、有能感類型と独自性欲求の関連を検討。	大学生297名 (男性56名 女性253名)	・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・独自性欲求尺度	記載なし	・他者軽視と独自性欲求では男性の方が女性より有意に高かった。 ・独自性欲求が他者軽視傾向に関連する。 ・他者軽視傾向の強い者は独自性欲求を持つ。
31	鈴木	2010	5因子性格検査と仮想的有能感の関連を検討し、他者を見下す者たちの性格的特徴に関する知見を得る。	大学生242名 (男性77名 女性165名)	・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・5因子性格検査	中央値	・他者軽視と遊戯性は正の、他者軽視と愛着性は負の相関がみられた。 ・仮想型は情動性が最も高く、逆に愛着性および統制性も低い。 ・仮想型は出来事を悪くとらえ、強い抑うつや敵意を感じやすい。
32	速水ら	2010	・アメリカの大学生を対象に仮想的有能感を測定する。 ・仮想的有能感と日常生活の情報収集の仕方の関連について検討。	ニューヨークの大学生168名 (男性83名 女性85名)	・仮想的有能感尺度 ・情報の授受 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・尊敬する人物 ・自己感の文化差 ・コミュニケーション ・テレビ・ネットサーフィンの頻度 ・携帯メールの頻度	平均値	・日本の大学生よりアメリカの学生の方が仮想的有能感と自尊感情は有意に高かった。 ・アメリカの学生においては自尊感情と仮想的有能感に負の相関がみられた。 ・アメリカの学生は日本の学生と比べて全能型が多い。 ・仮想的有能感が高いほどコミュニケーションが少ない傾向がある。 ・コミュニケーションを豊かにすることで仮想的有能感が抑止される。
33	伊田	2010	仮想的有能感とエリクソンの心理社会的発達の関係について	大学生60名 (男性31名 女性29名)	・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・エリクソン心理社会的段階目録検査	平均値	・全能型の特徴を理解する上で、他者から理解されている感覚や基本的な信頼感の問題に注目する必要がある。 ・仮想型は萎縮型よりも時間的展望や文句表設定の観点でより困難を抱える。
34	上村	2010	仮想的有能感と働くことに対する意欲の関係性について検討。	看護教員講習会受講者45名 (男性3名 女性42名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・労働意欲質問紙 ・勤労観質問紙	記載なし	・労働意欲における「職場へのコミット」、勤労観における「自己実現」および「関係構築」に有意な差が出た。 ・全能型・仮想型よりも自尊型は職場へのコミットが高いことが分かった。
35	小塩ら	2009	潜在的自尊感情、顕在的自尊感情、他者軽視の関連を検討。	大学生119名 (男性72名 女性47名)	・潜在的自尊感情尺度(筆記版・WEB版) ・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (松井1997))	平均値	・潜在的自尊感情は他者軽視傾向と有意な生の相関を示す。 ・顕在的自尊感情が低い時は、潜在的自尊感情が他者軽視に対してより大きく関連する。 ・自己に対する肯定的な感情価はもちつても、具体的な自己像に対しては否定的な評価を抱く傾向にあるものが最も他者軽視傾向を示す。
36	松田ら	2009	仮想的有能感と成長不安・抑制不安との関連性について検討。	大学生291名 (男性131名 女性160名)	・仮想的有能感尺度 ・不安尺度 ・YG性格検査	分類なし	・成長不安が低い場合に抑制不安の高い者が強い他者軽視傾向を示す。 ・抑制不安が低い場合に成長不安の高い者が強い他者軽視傾向を示す。
37	松本ら	2009	仮想的有能感といじめの関連性について検討。	高校生1062名 (1年生334名 2年生694名 3年生34名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・日常生活調査	平均値	・いじめ加害経験と被害経験との間には正の相関がみられた。 ・いじめ加害経験、被害経験ともに仮想的有能感と正の相関がみられた。 ・自尊型ではいじめ加害経験が有意に少なく、仮想型・全能型では有意に多かった。 ・自尊型ではいじめ被害経験が有意に少なく、仮想型では有意に多かった。
38	木野ら	2009	仮想的有能感と個人主義的傾向との関連性について検討。	日本、韓国、シンガポール、アメリカ、カナダの大学生	・ACS-2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・文化的自己観尺度	記載なし	・日本においては個人主義傾向が仮想的湯脳幹の形成に関連している可能性がある。 ・日本でのみ他者軽視傾向において性差があった。(男性>女性)
39	伊田	2009	仮想的有能感と生活価値観の関連性について検討。	大学生159名 (男性61名 女性97名 不明1名)	・仮想的有能感尺度2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・ESDS日本語版	平均値	・仮想型は安楽志向傾向がみられた。 ・他者軽視と集団志向は負の相関を示す。 ・萎縮型は全能型より自己決定志向が低く、集団志向は逆に萎縮型より全能型が低かった。
40	小平ら	2008	高校生同士が学業に対してどのようなコミュニケーションをとっているのかを、仮想的有能感と関連させ検討。	高校生308名 (男性150名 女性157名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・学業に関する会話質問紙 ・学業的援助要請尺度 ・学業的援助授与尺度	記載なし	・他者軽視傾向の強い者ほど、友人や教師を批評する傾向がある。 ・テスト結果や授業内容の難易度などのポジティブな結果に関しては、自尊感情と他者軽視それぞれに正の相関がみられた。 ・他者軽視傾向がある者は友人に対して援助要請を行わない傾向がみられた。 ・他者軽視傾向が強い者は直接的に答えを教える依存的援助を行う傾向がある。 ・仮想的有能感が高いほど、他者への援助要請や援助授与を回避しやすい傾向にある。
41	高橋ら	2008	子どもの自尊感情と仮想的有能感が家族内での役割行動にどのように関連するかを検討。	小学5・6年生244名 (男子107名 女子137名)	・自尊感情尺度 ・仮想的有能感尺度 ・集団(施設)クエスチョネア	分類なし	・「親の期待」「子ども自身の役割自認」「実際の参加度」が高いほど自尊感情は高くなった。 ・「親の期待」「子供の役割自認」「実際の参観度」が高いほど科想定有能感は高くなった。
42	木野ら	2008	仮想的有能感の形成にかかわる要因として、個人主義傾向との関連を検討。	日本の中学生シンガポールの日本人学校、および現地中学に通う生徒。	・ACS-2 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版 (山本・松井・山成, 1982)) ・文化的自己観尺度	分類なし	・文化的自己観尺度では相互協調性で日本がシンガポールより高く、相互独立性で得点が高い方がエアシンガポール、日本人学校、日本であった。 ・仮想的有能感が日本人の中学生が日本人学校の生徒より高い結果となった。 ・個人主義傾向が仮想的有能感の形成に関連している可能性がある。
43	松本ら	2008	対人関係の変化が仮想的有能感に及ぼす影響について検討。	高校生171名 (男子116名 女子55名)	・仮想的有能感尺度 ・教師関係安定感尺度 ・父親・母親との親和性尺度 ・友人関係尺度	分類なし	・仮想的有能感の変化量は教師関係の安定感の変化量、友人関係における信頼の変化量と有意な負の相関を示した。 ・教師との安定感が高まると、仮想的有能感が低下することが明らかとなった。
44	山本ら	2008	教師と生徒の関わり方が生徒の仮想的有能感にどのような影響を与えるかを検討。	学級担任5名 (男性4名 女性1名)	・面接調査 (①生徒の性格や考え方 ②生徒とのエピソード ③1年間での生徒の変化について)	分類なし	・仮想的有能感の低下群において、教師と生徒のかかわりの発生頻度が頻繁にみられた。 ・生徒の仮想的有能感の低下には教師の生徒理解が重要な要素となっている。

澤尻・村山: 仮想的有能感に関する研究動向

番号	著者	年号	目的	対象者	方法	分類基準	結果
45	伊田	2008	高校生において社会的発達および達成動機と有能感の4類型との関係性を検討。	高校生203名 (男子80名 女子122名 不明1名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・ESDS日本語版 ・達成動機尺度	平均値	・生産性とアイデンティティは仮想型と萎縮型が自尊型と是延納型より有意に低い。 ・自己充實的達成動機では仮想型が全能型より低い。 ・競争的達成動機では全能型が他の3群より有意に高い。 ・仮想的有能感がパーソナリティ発達の問題に関連している可能性が示唆された。
46	山本	2007	いじめの規定因として仮想的有能感に注目し検討していく。	高校生453名 (男性243名 女性210名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・中学生の日常生活質問紙 ・過去のいじめ経験	平均値	・全能型の生徒は、他の有能感タイプよりも、いじめ(加害)の生起が多かった。 ・仮想型の生徒は、他の有能感タイプよりも、いじめ(被害)の生起が多かった。 ・仮想的有能感の高い生徒は、加害・被害ともに経験が多かった。
47	熊谷ら	2007	過去のいじめ・いじめられ経験が自尊感情や仮想的有能感とどのような関連をもつのかを検討。	大学生152名 (男性93名 女性59名)	・メディアコミュニケーション意識尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・友人関係尺度 ・仮想的有能感尺度 ・いじめ経験 ・いじめられ経験 ・満足感	分類なし	・いじめ経験といじめられ経験は個人内で共存する可能性がある。 ・いじめた経験を強く認知している者は自尊感情が高くなり、いじめられ経験を強く認知している者は自尊感情が低いという関係がある。 ・いじめ経験は仮想的有能感に正の影響を及ぼしていた。 ・いじめられ経験はメディアコミュニケーションへの困難さへ影響を及ぼしていた。
48	松本ら	2007	仮想的有能感と部活動の二つの側面に注目して、問題行動に及ぼす影響を検討。	高校生447名 運動部113名 文化部69名 無所属265名	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・問題行動 ・いじめを行った経験 ・いじめを受けた経験	平均値	・運動部は文化部・無所属と比べ自尊感情が高かったが、運動部の仮想型は身体的いじめの加害者にも被害者にもなりやすい傾向がある。 ・共同性の高い部活においては仮想的有能感が高まる傾向があることが示唆された。
49	伊田	2007	他者や社会的基準による競争的達成動機と自分なりの基準によって達成を目指す自己充實的達成動機と仮想的有能感の関係性を検討。	大学生100名 (男性50名 女性50名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・達成動機測定尺度	平均値	・仮想型は自己充實的達成動機が低く、他者に勝つという姿勢も中程度にとどまり、実勢の具体的な行動や経験に裏打ちされた自信をもてないまま周囲に翻弄されやすい。 ・全能型は他者軽視と中程度の相関関係にある競争的達成動機のみならず、自己充實達成動機も比較的高く、「競争に勝つことが自分らしい」という自信を持っている。
50	白木ら	2007	仮想的有能感の高低による対人関係の在り方について無意識的な側面を考慮して検討。	大学生・大学院生202名 (男性88名 女性114名)	・精神健康調査票 ・仮想的有能感尺度 ・青年期用対象関係尺度	分類なし	・仮想的有能感は他者を軽視するという側面が目目されるが、仮想的有能感の高群では対人関係に不安を抱えているものが多かった。 ・仮想的有能感の高まりの要因のひとつとして不安への対処があることが推測される。
51	山本ら	2007	仮想的有能感と問題行動との関連について検討。	高校生453名 (男性243名 女子210名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)) ・問題行動 ・いじめを行った経験 ・いじめを受けた経験 ・不快喚起場面尺度	平均値	・全能型の生徒は他の有能感タイプよりも、不良行為やいじめ加害の生起が多かった。 ・仮想型は敵意や抑鬱感情が高く、蓄積されたストレスが他者軽視につながっている可能性がある。
52	小平ら	2007	対人関係で経験される敵意感情と抑うつ感情に焦点を当て、仮想的有能感と感情経験との関連を検討する。	大学生998名 (男性587名 女性411名)	・仮想的有能感尺度 ・自尊感情尺度 (Rosenberg自尊感情尺度日本語版(松井, 1997)) ・日記式質問紙	平均値	・他者軽視をする傾向が強いほど、日常から強い敵意感情を経験する傾向にあるのに対し、自尊感情の低さは経験される抑うつ感情の強さと関連していた。 ・仮想型は出来事の良いの評価値が低い数値を示し、抑うつレベルが高い。 ・対人関係によって生じた否定的感情は仮想型において、より他者に対する攻撃として方向づけられやすい。



# 仮想的有能感に関する研究動向

—— 自尊感情や関連する感情との関係に注目して ——

## A Research Trends on the Assumed Competences:

Systematic Review with respect to the Self-confidence and Relevant Feelings

澤 尻 紘 輝\*<sup>1</sup>・村 山 拓\*<sup>2</sup>

Koki SAWAJIRI and Taku MURAYAMA

特別ニーズ教育分野

### Abstract

This is a systematic review of the researches on the Assumed Competences of the youth in Japanese context. In contrast with the Self-esteem or Self-confidence, Assumed Competences is thought to be a psychological type having the feeling of self-effectiveness not through the experience of success but through the evaluating negatively and looking down on the nose of the others. Assumed Competence Scale 2 has been developed for assessing a belittling attitude of youth by Hayamizu et al. (2004). According to this scale, Assumed Competences can be categorized into the 4 types by the combined application of the scale of Self-confidence, of which the most cases utilize the Japanese version of the scale by Rosenberg.

By reviewing the researches, the features of the feeling and psychological attitudes in relation to Assumed Competences are found as follows: the negative and passive mental attitudes and their instability, negative correlation between Assumed Competences and human relationship, the direct displacement of the aggression and so on. With respect to the academic works, the students with Assumed Competences are passive for the collaborative learning because of the lack of attitude being open to the opinion and discussion with others.

The research of Assumed Competences of the disabled students are not enough and only 2 researches are found in this review. Further researches are to be focused on the developmental disabilities and the combined scale for understanding the features of Self-confidence and recipe for supporting their cognition.

**Keywords:** Assumed Competence, Self-confidence, Disrespect to Others, the disabled children and persons

*Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本論文は日本国内の文脈における仮想的有能感の系統的レビューである。自尊感情や自尊心と対比して、仮想的有能感は成功体験に基づかず、他者を低く評価したり他者を蔑視したりすることによってもたらされる心的状態である。他者軽視の尺度として速水ら（2004）によって仮想的有能感尺度が開発されている。このスケールを用い、自尊感情の尺度と併用することによって、仮想的有能感は4つのタイプに分類することが

---

\*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

\*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

できる。自尊感情の尺度としてはローゼンバーグによる尺度の日本語版が最も多く使用されていた。

レビューを通して、仮想的有能感と関連する感情、心理面の特徴として以下のものが見出された。否定的、受動的な精神状態やその不安定さ、仮想的有能感と対人関係形成の負の相関、攻撃性への直接的な置き換え等である。学業との関連では、仮想的有能感を強く持つ生徒は共同学習に対して消極的で、他者の意見や議論に対して前向きな姿勢に欠けることも示唆された。

障害児の仮想的有能感については、研究が十分に行われておらず、今回のレビューでは2件のみ見出された。発達障害児に関する研究が今後必要であり、仮想的有能感と組み合わせる自尊感情尺度やその関連性を検討することが、発達障害児の自尊感情や認知の理解につながると考えられる。

キーワード: 仮想的有能感, 自尊感情, 他者軽視, 障害児・者